

武田家滅亡の地

天目山 紀行

中央線が甲府に近付き、笹子トンネルをぬけると山あい小さな初鹿野という駅がある。勿論急行は止まらないし大半の人は見落してしまう。

此処が信玄以来、甲府軍団とすべての武将から恐れられ、風林火山の旗の下あわよくば天下の権を握ったであろう勝頼の敗残の地なのである。

信玄死後三年間は外征を禁じられた勝頼であったが種々な事情により軍を起し、長篠の戦いで再起不能の敗軍となった勝頼は、織田、徳川の連合軍の進攻に築城間もない新府城を自らの手で焼き、日毎に離反する重臣等に憤怒の時をすごす間もなくここ初鹿野（当時は甲州海道の宿駅で駒飼といった）についた時は手勢わずか七〇〇人

に満たず、それも女子供が大半であったという。目指す岩殿城は小山田信繁の織田方へのね返えりにより入ることができず、止むなく大菩薩の南嶺の日川添いに逃げ込んだのである。

流れゆく 日川の波 しぶきにも

亡びしものゝ 悲しみをみる

日川添いに一籽ばかり入ったところに四郎作古戦場と鳥井畑戦場がある。

四郎作古戦場は勘気を蒙っていた小宮山昌友が帰参が叶い感激して討死したところ、鳥井畑は日川をはさんで織田の連合軍と勝頼の侍臣が組織的に戦った最後の場所である。

つわものゝ 命落せし 河原には

雑草くさの繁りて 哀れさを増す

鳥井畑から五〇〇米ばかり上流に若干の台地がある。勝頼は女子供のみになった手勢をここにまとめて柵を設けて死場所としたと思われる。

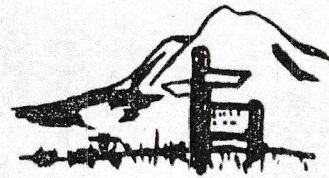
地名を田野といつて後年徳川家康が勝頼等の冥福を祈つて景德院という寺を建立し、勝頼、信勝、夫人等と共に死んだ霊をとむらい五輪の塔をたててある。境内には信勝の元服石や自害したと言伝える石があるが之はどうも後年村人が創作して供養したものらしい。勝頼は自害したのか戦死したのか色々文献を調べてみたが確かなことは判らない。土屋惣藏の片手切りで有名な奥の大蔵沢で自害したと村の古老は我々に話してくれた。

田野の奥の木賊に栖雲寺がある。武田家の菩提寺であつたことは

間違ひなく寺宝も研究の価値のあるものが揃っている。裏山に奇岩怪石が累々としており勝頼の首級を一時隠したという首穴もある。いくつかの昔の部落が合併して大和村となり夫々の伝説を固執しているのも面白いが天目山民宿は素朴で再訪したくなる仙境である。



厳さに魅せられたとき、自分自身がひとまわりもふたまわりも大きくなつたような喜びと感動を覚えた。現在では、こうした段階を経て山に登る必要は必らずしもないだろうが、大自然の力は少しも變つていないのだから、事前の周到な準備だけは怠ってはならない。自分達の山行をいかに美しく、実り多い豊かなものに仕上げてゆくかは、平素の準備と心のもち方如何にかかっていると書いても決して過言ではないと思う。



あとがき

この詩情の旅は、山岳雑誌や所屬していた山岳会の機関紙等におりに、寄稿したのをまとめたものである。

短歌は旅のおり、つれづれのままに手帳にかきつけたものをまとめたもので題名の「詩情の旅」は、いっどこにゆくにも心に詩をもとめて旅をしたので、そのまま題名にした。

紀行文は学友誌や同人誌に載せたものの一部をそのまま転載したものである。

人生も年を経るとともに古い暦をさぐってみたくなるもので、そうしたとき岳友やクラブの心ある人々にすすめられどうにかまとめたのがこの本である。

旧い言葉や、現在訪ねてみると異なっているとあると思われる

るが、私の心の旅路なので手直しをせずに、そのまゝまとめてみた。
観光地であっても史実を探りできる限り歴史の原点に立って観察
したつもりである。

こうした心情に好意を寄せて出版に協力して下さった、同盟印刷
の高橋社長に厚く礼を述べたい。

また本書の刊行を示唆し、装てい等にその芸術性を助言してくれ
た、多くの岳友に満腔の謝意を表すると共に、有形無形の助言と協
力を与えてくれた、諸姉に厚く御礼を申上げたい。

私としては好きな本のひとつとなつてうれしい。

詩情の旅

昭和58年3月3日

著者 吉 田 貫 一 郎

発行所 アルペン・シユプール・クラブ

東京都文京区本駒込六―九―二〇

印刷所 同盟印刷株式会社

定価 八八〇円

(送料二五〇円)